

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：35302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00856

研究課題名（和文）ALTが語るナラティブとアイデンティティ変容に関する研究：社会文化的・言語的視点

研究課題名（英文）A Study on the Narratives of Assistant Language Teachers and the Transformation in Their Identities: Socio-Cultural and Linguistic Perspectives

研究代表者

坂本 南美（Sakamoto, Nami）

岡山理科大学・教育学部・准教授

研究者番号：40804810

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ナラティブ研究を基盤にALT（Assistant Language Teacher）のアイデンティティ変容の探究を目的とした。日本の英語教育において、ALTはコミュニケーション型な授業を実現してきた。一方で学校に順応し長く教壇に立つALTもいる中、途中退職を希望する者もいる。これらを背景に本研究は、(1) ALTへのインタビューの分析から、日本の教育現場におけるアイデンティティ構築および変容の様子を探り、(2) ALTの専門的資質向上を支えた要素の探究を試みた。社会文化的、文体論的、物語論的なナラティブ分析により統合的に考察することで、より深いALT理解と英語授業の質的改善の一助へつなげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本のALTに関する研究では、アイデンティティ、感情、教師の信念、同僚性の構築など内面的側面に着目した研究は非常に少ない。この背景のもと、ALTのアイデンティティ変容およびその成長への理解を深めたという点で、本研究の学術的意義は大いにありと考えられる。また、教師のナラティブ研究において、異文化の文脈で教壇に立つALTのナラティブ分析を進めた点においても意義深いといえる。さらに、昨今の教育現場では授業改善を目指した教員研修が常に行われている中、チーム・ティーチング授業に焦点を当てた研修において、ナラティブ・アプローチの可能性を示唆したという点では社会的意義が大きいと考えている。

研究成果の概要（英文）：The overall aim of this research was to clarify the identity transformation of Assistant Language Teachers (ALTs) on the basis of narrative research. In English education in Japan, ALTs have realized communicative classroom development. However, while some ALTs have adapted to their schools and have been teaching for a substantial period, others have decided to retire in the middle of their careers. To explore their inner selves, this study (1) analyzed ALT interviews to discover how they have positioned themselves in the new environment of English education in Japan and how they have been transformed. (2) a new approach to narrative research was attempted with ALTs who are uniquely positioned as language teachers. By integrating sociocultural, stylistic, and narrative analyses of their narratives, we were able to examine their identity transformation and growth to gain a deeper understanding of ALTs and help improve the quality of their English classes.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 ALT ナラティブ アイデンティティ 教師の成長

1. 研究開始当初の背景

本研究を始めた2018年は、文部科学省(当時の文部省)が1987年にJETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)を導入してから約30年を迎えた時期であった。このプログラムによって、多くのALT(Assistant Language Teacher: 外国語指導助手)が日本に招聘され、JTE(Japanese Teacher of English)とのチーム・ティーチング授業の実現により、コミュニケーション型授業展開が実践されるようになった。導入以降の日本の英語教育を振り返ると、小学校では2011年に5,6年生で外国語活動が、また2020年には3,4年生で外国語活動、5,6年生で英語科の授業が実践されるようになり、大規模な英語教育改革が実施され、JTEやHRT(Homeroom Teacher)とともにより多くの授業でALTが教壇に立つようになった。昨今では、JETプログラムだけでなく、民間の会社からの派遣や地域人材、姉妹都市プログラムなど雇用体制は多様化し、ALTは欧米からだけでなく、アフリカや南米、アジアの国々など様々な地域から招聘されている。そのことに伴って、ALT一人ひとりの文化的背景やバックグラウンドは、以前と比較すると非常に多彩となった。

ALTの導入以降、チーム・ティーチング授業やALTに関する研究を概観すると、JETプログラムなどの制度に関わる研究やALT全体への実態調査、ALTが日本人教師の英語発話や学習者の英語力に及ぼす影響、チーム・ティーチングにおける授業研究、ALTと日本人教師や児童・生徒との関係性など、様々なアプローチによる多様な研究が行われてきた。一方で、ALT個人に着目し、個々のALTに寄り添うアプローチをとる研究は非常に少ないのが現状であった。学校での業務や生活上の課題を探る研究では質問紙調査を行うことが多いが、それだけではすくいきれない内面的要素がある。これらを背景に、本研究ではALTのナラティブを質的に分析することにより彼/彼女らのアイデンティティの変容を探求し、言語教師としての成長および成長を支えた要素を探った。

2. 研究の目的

上記の研究開始当初の背景をふまえて、本研究はALTのナラティブの質的分析により、彼/彼女らの教師としてのアイデンティティ変容の様子を明らかにすることを試みた。本研究は、奨励研究「日本の中学校に勤める外国人指導助手の語りを通じたアイデンティティ変容に関する研究」(2014年度)で取り組んだALTのアイデンティティ変容に関する探究の発展的な研究として位置づけている。研究協力者の数や校種を広げ、個々のALTへのインタビューを通してアイデンティティ変容のプロセスを社会文化的視点からだけでなく、文体論的視点、物語論的視点の3つの異なる視座から多面的に分析し、統合的に理解を深めていった。具体的には、(1)ALTへのインタビューの分析から、彼/彼女が日本の英語教育という新しい環境でどのように自らを位置づけてきたか、そのアイデンティティ変容の様子の探り、(2)言語教師として独自の立場に立つALTの専門的資質の向上を支えた要素を明らかにすることを試みた。また、(3)チーム・ティーチング授業改善へ向けた新たな教員研修の可能性を示唆した。

まず(1)は、日本の英語教育という異文化の文脈で、日々の授業を通して、教師として教壇に立つ中で起こる内面的な変容を辿るという視点である。ALTは、母国や他国での教師経験や教員資格を求められるものではないが、JETプログラムの場合であれば来日した後の集中セミナーを通して日本の英語授業の概要を学び、教壇に立つ中で経験を重ね、チーム・ティーチングを行うJTEとともに成長していく。そこには、教師としての成長と異文化への適応との二つの側面がある。これまでのALTに関する研究では、ALTのアイデンティティに関しては、あまり十分な研究がなされていないという実状がある。ALTがその力を十分に発揮できるチーム・ティーチング授業を展開するためにも、彼/彼女らがいかに同僚や生徒との関係の中で自らのアイデンティティを構築、または再構築していったかを探求することは社会的意義が大きいと考えられた。

次に(2)については、日本の英語授業では英語話者であるALTが日本人英語教師のAssistantの立場として教室に入るという特異な文脈がある。対象言語の専門家としてのALTと日本の学校教育・英語教育の専門家としてのJTEが、チーム・ティーチャーとして行うチーム・ティーチング授業は、実践的側面と教育的観点から授業をデザインし、生徒の英語力だけでなくより効果的で多様なコミュニケーションの機会を提供することができる。その中で、ALTの専門的資質向上を引き出していった要素を探求することは、ALTとの授業への理解を深め、チーム・ティーチング授業改善について大いに示唆するものであると捉えることができる。

(3)は、ナラティブ・アプローチが持つ研修会の枠組みへの可能性という視点である。教師のナラティブは、教師が自らの授業や教室での出来事を理解するリソースとなるとともに、ナラティブによって言語教師が自らの経験を語る(語りなおす)とき、彼/彼女らは自己の授業を再認識し、それが教師としての成長を支える(Johnson and Golombek, 2002)。ALTのナラティブを通して、彼/彼女らのアイデンティティの変容およびその成長を支えた要素を探求することは、ALTの内面的変容への理解を深めるだけでなく、ナラティブ・アプローチが語り手の教師としての成長に関わる機会の創出にもつながる。インタビューという社会的営みが、どのように自己の実践を内省するナラティブ空間を創り出していったかについて理解を深めることは、授業改

善を目指す研修会へのナラティブの援用への示唆へとつながり、大きな意義があると考えられた。

3. 研究の方法

本研究は、ALT のナラティブを質的に分析することにより、彼/彼女らのアイデンティティ変容を辿り、その成長の様子および成長を支えた要素を探ることを目的としたものである。この目的の実現のために、以下の3つの段階によって研究を進めた。

(1) ALT へのインタビューの実施

本研究の主要なデータは、ALT への半構造化インタビューである。個々の ALT の変容を探るため、一人の ALT に対してインタビューは2度行われた。1度目のインタビューは、彼/彼女らが来日して各学校で英語を教え始めて間もない時期に行い、2度目のインタビューは、1度目のインタビューから8ヶ月から1年後に実施した。2度目は、それぞれが勤務する学校での授業と日本での生活を通して、経験を重ねた後の時期となる。半構造化インタビューは、事前にパイロットスタディを行った質問項目をもとに実施し、授業での経験、英語を教える上での喜びや難しさ、チーム・ティーチング授業、指導目標、教師の信念などに関する内容について質問した。インタビューでは、相互のやり取りの中で生じたテーマに対しても追加の質問を挿入することがあった。分析には、インタビューデータの他に、フィールドノート、ALT とチーム・ティーチングの授業を行った JTE へのインタビュー、ALT の授業に参加した生徒が書いたリフレクション、生徒が書いたアンケート、インタビューに対する研究者のリフレクションなどを必要に応じて使用した。

(2) インタビューデータの分析

ALT へのインタビューによって収集されたナラティブデータをテキスト化し、質的な分析を行った。その際、3名の研究者によりそれぞれ社会文化的視点、文体論的視点、物語論的視点の3つのアプローチから分析を行い、各分析結果を統合しながらナラティブから見える ALT のアイデンティティの変容をより正確に理解することを試みた。社会文化的視点をもとにした分析では、ALT とともにチーム・ティーチング授業を実施した JTE へのインタビューおよび授業に参加した生徒が書いたリフレクションも使用した。

(3) 理論の構築

ALT のナラティブデータの分析を通して、個々の ALT の教師としての成長やアイデンティティの再構築を示す概念を抽出し、それらの概念を関連付けることで各 Teaching Theory を構築した。Teaching Theory 構築の際には、ALT のアイデンティティの変容、教授理論、専門的力量の開発を可視化した概念相関図を作成し、カテゴリー間の関係を示した。それぞれの ALT の概念相関図は、その ALT の教育理論の根底にある考え方、感情、同僚性、他者との関係、授業実践に対する考え方の変容などを表現している。

以上の3つの段階の研究活動と並行して、ナラティブを含む質的研究や外国語授業研究、教師教育分野における先行研究の再読・再考と仮説の設定・見直しを行い、研究手法の確立・見直しも随時行った。また、研究結果を小・中学校の英語教員研修等の機会に参加者へ伝えながら、授業改善の方策について議論を深めた。

4. 研究成果

本研究の成果は、(1) ALT のアイデンティティ変容のプロセスの分析、(2) ALT の成長を支えた要素の分析、そして(3) インタビューに関する分析の3点に分類できる。以下項目ごとに要点を整理する。

(1) ALT のアイデンティティ変容のプロセスの分析

本研究では、研究協力者の各 ALT へ時間を空けて2度のインタビューを実施し、アイデンティティ変容の様子を辿った。坂本(2021)「語りを通じた Assistant Language Teacher の気づきに基づく成長モデルの構築」では、本研究の成果をまとめ、ナラティブ分析をもとに ALT の専門的資質向上の枠組みとして「教師の気づきによる成長モデル」を提示した。具体的には、ALT のナラティブデータの質的分析をもとに、彼/彼女らが個々の文脈の中で、異文化の文脈における語りのはじまり、教師の気づき(認知的気づき、感情的気づき、同僚性への気づき)の経験(Sakamoto, 2011)、それぞれの文脈における言語教育への investment(Norton, 2000)、協同的实践としての同僚性の構築、やりがいを軸とした成長への歩みを辿り、言語教師としてのアイデンティティを変容させながら専門的資質向上のプロセスを辿る様子をまとめた。そのうえで、教室での社会的関係を通して生じた ZPD (Zone of Proximal Development) (Vygotsky, 1978) の出現が ALT の教師としての成長を加速させた経緯についても提示した。また、Sakamoto&Teranishi(2019)“A case study of ALT identity construction through narrative inquiry: sociocultural and stylistic perspectives”では、一人の ALT のナラティブに焦点を当て、来日直後の語りとその1年後に実施したインタビューを比較検証し、JTE との同

僚性の構築が彼女の教師としての気づきを促し、その成長のプロセスへと進んでいった変容について社会文化的視点および文体論的視点からの解明を試みた。

(2) ALTの成長を支えた要素の分析

坂本(2018)「日本の高等学校に勤めるALTのアイデンティティ構築における事例研究」では、ALTが文化的背景から経験してきたバックグラウンドを軸に、生徒たちとの関係の中で、「教師としての自分」と「生徒にとって親しみやすい存在である自分」とを意識的に区別し、その境界を行き来するフレキシブルな存在として自己をメタ的に位置づけることが授業改善へとつながっていった様子を描いた。また、チーム・ティーチングをともに行うJTEとの同僚性について探求した坂本(2019)「日本の公立中学校に勤めるALTの同僚性に関するナラティブ研究」では、相互的に教師が成長していくために高めるべき三つの要素(Allwright 2016)をベースに、教師として成長し続ける同僚の存在がALTの学びに向かう視点を引き出し、自らの授業スタイルの構築へとつながっていった過程を捉えた。そして、坂本・今井・前田・岩本(2020)「参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学び」では、日本国際教養学会第8回全国大会でのシンポジウム「参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性」の内容をまとめ、教師の語りそのものを読み解きながら、多様な立場から英語教育について論考した。

(3) インタビューに関する分析

本研究の主要なデータは個々のALTへのインタビューである。インタビューを「研究手段としてのインタビュー」よりもむしろ「社会的実践としてのインタビュー」(Talmy, 2011)の観点から捉え、インタビュアーとインタビューイの関係性に着目した。インタビューでのALTとインタビュアーとのインタラクションは、教育目的や教育観などの抽象的な内容から実際の授業場面に焦点を当てて具体的な事象を振り返りながら語られる場面まで、多様なやり取りが行われている。分析の結果、ALTと同じく中学校の教壇に立った経験の長いインタビュアーが、インタビューでのやり取りの中で、研究者だけでなく、同僚やメンターとしての役割を行き来しながら返答する場面が随所に見られ、場面によってはまるでその授業シーンが目の前で繰り広げられているかのようなやり取りも繰り広げられていた。これらの分析結果から、坂本(2021)「ALTのナラティブ研究におけるインタビュアーとインタビューイとの関係性」では、インタビューが語り手の経験を解釈する媒介的空間として機能するためのインタビュアーの関与とそのコードスイッチングについて考察した。

以上の研究の総合的なまとめとして、研究代表者及び研究分担者は、2022年2月に『ナラティブ研究の実践と応用』を共同出版し、研究成果を社会に向けて発信した。また、2022年3月には、ナラティブ研究を軸とした科研費成果発表会「ナラティブ研究の実践と応用」を開催し、教師のナラティブだけでなく多岐にわたるテーマからナラティブ研究を捉え、多面的な意見交流を通して議論を深めた。

<引用文献>

- Allwright, D. (2016). Team teaching, team learning and developing of collegiality. In A. Tajino, T. Stewart, and D. Dalsky (Eds). *Team Teaching and Team Learning in the Language Classroom: Collaboration for innovation in ELT* (pp. xiv-xx). Routledge.
- Johnson, K. E., & Golombek, P. R. (2002). *Teachers' narrative inquiry as professional development*. Cambridge University Press.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity, and educational change*. Longman.
- Sakamoto, N. (2011). Professional development through *kizuki* – Cognitive, emotional, and collegial awareness. *Teacher Development*, 15(2), 187–203.
- Talmy, S. (2011). The interview as collaborative achievement: Interaction, identity, and ideology in a speech event. *Applied Linguistics*, 32(1), 25–42.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 坂本 南美, 今井 裕之, 前田 幸也, 岩本 華苗	4. 巻 6
2. 論文標題 参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学び	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JAILA Journal	6. 最初と最後の頁 110-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nami SAKAMOTO & Masayuki TERANISHI	4. 巻 -
2. 論文標題 A Case Study of ALT Identity Construction Through Narrative Inquiry: Sociocultural and Stylistic Perspectives	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PALA 2019 Proceedings online	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 坂本 南美, 今井 裕之, 前田 幸也, 岩本 華苗	4. 巻 -
2. 論文標題 参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAILA第8回全国大会プロシーディングズ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 坂本 南美	4. 巻 -
2. 論文標題 Assistant Language Teacherのアイデンティ変容に関する社会文化的考察 公立学校に勤めるALTの語りから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本英文学会第91回全国大会プロシーディングズ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥田 恭士	4. 巻 22
2. 論文標題 『潜水服は蝶の夢を見る』への言語学的アプローチ - フランス語人称代名詞“on”をめぐって -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥田 恭士	4. 巻 3424
2. 論文標題 私たちはみな一本の木である～書評『ナラティブ・メディスンの原理と実践』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本 南美	4. 巻 54 B
2. 論文標題 日本の高等学校に勤めるALTのアイデンティティ構築における事例研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡山理科大学紀要	6. 最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坂本 南美	4. 巻 5
2. 論文標題 日本の公立中学校に勤めるALTの同僚性に関するナラティブ研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAILA Journal	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 坂本南美
2. 発表標題 オーストラリアの日本語教育におけるALTの自律的学び
3. 学会等名 日本国際教養学会 (JAILA) 第9回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nami SAKAMOTO
2. 発表標題 Autonomy of teacher learning among Assistant Language Teachers in Japanese language education in Australia
3. 学会等名 The Applied Linguistics Association of Australia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nami SAKAMOTO & Masayuki TERANISHI
2. 発表標題 A case study of ALT identity construction through narrative inquiry: sociocultural and stylistic perspectives
3. 学会等名 Poetics And Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 Assistant Language Teacherのアイデンティティ変容に関する社会文化的考察 - 公立学校に勤めるALTの語りから -
3. 学会等名 日本英文学会 第91回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 日本の公立中学校に勤めるALTの同僚性に関するナラティブ研究
3. 学会等名 日本国際教養学会 (JAILA) 第7回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 公立高等学校に勤めるALTの語りを通じたナラティブ研究
3. 学会等名 全国英語教育学会 第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nami SAKAMOTO
2. 発表標題 Teacher development through sharing teachers' perception of team-taught language lessons
3. 学会等名 Seminar for language teachers: Becoming a mindful L2 teacher/researcher using an SCT framework
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂本南美、今井裕之、前田幸也、岩本華苗
2. 発表標題 参加者たちのナラティブから探る英語教育の教えと学びの可能性
3. 学会等名 日本国際教養学会 (JAILA) 第8回全国大会 シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 語りを通じたAssistant Language Teacherの気づきに基づく成長モデルの構築
3. 学会等名 第27回関西英語教育学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 ALTのナラティブ研究におけるインタビュアーとインタビュイーとの関係性
3. 学会等名 全国英語教育学会 第46回長野研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坂本 南美
2. 発表標題 ナラティブ研究：社会的営みとしてのインタビュー
3. 学会等名 科研費成果発表会「ナラティブ研究の実践と応用」
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 那須 雅子、坂本 南美、寺西 雅之、和田 あずさ、飯塚 晃三、秋山 容洋、長谷川 裕、久世 恭子、大西 好宣、劔持 淑、保坂 裕子、小比賀 美香子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学術研究出版	5. 総ページ数 174
3. 書名 ナラティブ研究の実践と応用 - 現代社会への理解と貢献に向けて -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ナラティブ研究の実践と応用
<https://www.narratives-lab.com/>

Researchmap
<https://researchmap.jp/namisakamoto>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺西 雅之 (Teranishi Masayuki) (90321497)	兵庫県立大学・環境人間学部・教授 (24506)	
研究分担者	奥田 恭士 (Okuda Yasushi) (10177173)	兵庫県立大学・環境人間学部・教授 (24506)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関